

Newsletter

金沢大学 フレスコ壁画研究センター

Vol.4

January 2012

◆ [南イタリア中世壁画群診断調査プロジェクト]
2011年度フィールド調査の実施

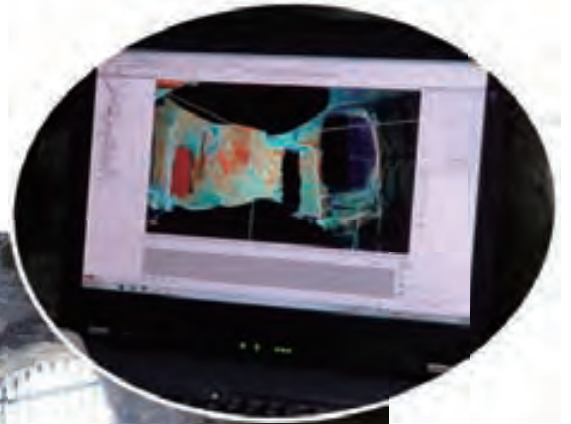
- * 調査の概要と調査レポート
- * 金沢大学のデジタルアーカイブ・システム
- * 2011年度フィールド調査活動アルバム

◆ [日伊教育研究連携事業]
フレスコ壁画の修復実習：
補彩法「カラーセレクション」

- ◆ 研究者の横顔 第4回
600年の時を経て教えられたこと
- ◆ コラム第4回 私のおすすめフレスコ壁画
ルイーニの「最後の晚餐」
- ◆ [文化庁連携事業] 4者連携ワークショップ
国宝「高松塚古墳壁画」の保存を考える
- ◆ 連載 フレスコ八景 第四景
サンタ・トリニタ教会
サッセッティ礼拝堂の壁画

南イタリア中世壁画群診断調査プロジェクト

2011年度フィールド調査の実施
2011. 9. 6~9. 16



Chiesa del Padre Eterno

経緯と目的

当フレスコ壁画研究センターは2010年5月、「南イタリア中世壁画群診断調査」という新プロジェクトを全学的に実施する拠点として金沢大学人間社会研究域に設置されました。ここに金沢大学の新たな挑戦 - 人文系、芸術系、工学系、医薬系などの多岐にわたる分野の研究者がともに取り組む画期的な挑戦が4年計画でスタートしたのです。この研究プロジェクトは、まだあまり知られていない南イタリアの洞窟教会に描かれた中世壁画の現状を科学的に診断調査し、その成果を医療における電子カルテにならった文化財カルテとしてデジタル・アーカイブ化することを目的としています。このプロジェクトは日伊共同の国際研究プロジェクトですから、フィレンツェの「サンタ・クロッチェ教会大礼拝堂壁画の修復プロジェクト」において10年来のパートナーである国立フィレンツェ修復研究所のほか、プーリア州文化財監督局やバーリ大学美術史科、また3Dレーザースキャン計測に関してはジェノヴァ大学の環境工学科等のイタリア研究機関との連携や交流もプロジェクト推進の大切なファクターです。

学術的意義

9世紀以降、東方のビザンティン帝国やシチリア島から来たギリシア正教の修道士たちが南イタリア各地の凝灰岩台地に定住するようになった結果、多くの特徴的な洞窟教会や修道院が誕生し、祈りの空間である堂内には旧約・新約聖書に題材を求めた多様な図像（壁画）が描かれました。こうして南イタリアのカラブリアやカンパーニア、バジリカータ、プーリア地方には9世紀から13世紀にかけてのイタロ・ビザンティン様式の壁画群が数多く残されることになったのです。そ

れらは概して現在の市街地や観光コースから遠く離れ、簡単には近寄れない地域に広がっており、1960年代にわずかな調査研究が実施されて以降、本格的、系統的な調査研究が立ち遅れたままになっているため、多くは劣悪な環境下で修復保存の対策すら立っていない現状にあります。これらの歴史的にも、芸術的にもきわめて貴重な文化遺産は、中東全域、トルコからシリア、グルジア、アルメニア、エジプトまで、あるいは初期キリスト教が伝播した広範な地中海世界に現存する洞窟教会や洞窟修道院の系列の中にこそ位置づけられるべきもので、早急に各地の研究諸機関が協力して調査・保存に乗り出す必要があります。今回のプロジェクトは、そうした地中海世界全体を視野に入れての歴史的な文化財保護運動に一石を投じるものとなるはずですが、ことに中東ビザンティン地域の壁画技法や分類学に関しては、これまで学術的な光が当てられたことがなく、系統的な知見が得られていないという点からも、このプロジェクトには革新的な意義があります。

フィールド調査

壁画の組成や技法を解明し、その現状を記録するために、高度なノウハウを蓄積する国立フィレンツェ修復研究所の専門家による診断調査に加えて、金沢大学チームが導入するデジタル診断機器による詳細な計測データが加わります。壁画の組成に関する情報を知るために、光学機器を用いた各種の非破壊調査、つまり散乱光や斜光線照射のもとでの高精細写真撮影、マイクロスコープによる描画面撮影、赤外線や紫外線照射による調査、色差計測定などが実施されます。さらに表層の状態や、炭酸塩化の過程や破壊の過程で作られる化学合成物質を

知るために、顕微鏡分析を含む化学的調査も行われます。なお、金沢大学チームは今回のフィールド調査で2種のレーザー・スキャナ（三次元空間スキャンとミクロン単位での壁画スキャン）を用い、これ以上ない詳細な壁画の現状記録に挑みました。なお、本プロジェクトのもう一つの目的には、日本の最先端技術を特殊な壁画調査フィールドでも効果的に利用できるように工夫する点も加えられています。フィールドでの壁画診断調査においてだけでなく、あらゆる文化財研究の場で有益なLED照明機器（将来的には有機ELタイプの照明装置を視野に入れて開発）と小型バッテリーの組み合わせシステムを導入しました。最小の消費電力で安定した光源、有害光線の放射を最大限に抑えた照明機器の開発は、フィールド調査のみならず遺跡モニュメントや美術館、博物館の展示照明としても利用可能だからです。



グラヴィーナ峡谷

金沢大学チームの参加メンバーと担当

調査担当の内容	メンバー	所属
写真撮影(散乱光・斜光) 	宮下 孝晴	人間社会研究域 教授
	関谷 倫寿	人文学類フィールド文化学コース学生
3Dスキャン(建築空間・壁画) 	江藤 望	人間社会研究域 准教授
	宮下 明珠	センター研究員
	カルロ・バッティエリ	共同研究者
壁画のマイクロスコープ撮影 	真田 茂	医薬保健研究域 教授
	木村 仁美	人文学類フィールド文化学コース学生
壁画診断調査・各種測量 	五十嵐 心一	理工研究域 教授
	川窪 洸太	人文学類フィールド文化学コース学生
カラーサンプリング・色測定 	尾曾 真梨子	人文学類フィールド文化学コース学生
セッコ法による模写制作	大村 雅章	人間社会研究域 教授
文献資料収集	宮下 睦代	センター客員研究員
記録(スナップ・VTR)	下村 滋美	センター研究員
全体のコーディネート	上口 大介	センター・コーディネーター

金沢大学チームの利用したデジタル計測機器

デジタル計測機器を用いて分析診断された壁画の現状データはすべて Apple iPad に記録、集約統合され、当センターとイタリアのカルトゥーラヌオーヴァ社が共同開発するデジタル・アーカイブ（データベース）システム《Modus Operandi》に記録されます。

- 高精細デジタル撮影カメラ（散乱光）：PENTAX 645D
- 高精細デジタル撮影カメラ（斜光）：PENTAX 645D
- 3D スキャナ（建築空間用）：TOPCON GLS-1500
- 3D スキャナ（壁画面用）：Konica Minolta Range5
- 赤外線サーモグラフィ：NEC/Avio G30
- 色差計：Nippon Denshoku NF333
- 水分計：Kett HI-520
- デジタル・マイクロスコープ：3R A200
- 温度・湿度計：testo 610
- データの集約：Apple iPad



調査実施期間 2011.9.6～9.16

調査対象としての壁画

今回はプーリア州のグラヴィーナ・イン・プーリア市に点在する洞窟教会の壁画4カ所（壁画をブロック移動して保存している博物館内の展示室を含める）で調査を実施。

<p>(1) サン・ヴィート・ヴェッキオ教会 (壁画移動前の洞窟)</p> <p>グラヴィーナ・イン・プーリアの旧市街地の南、フォルナーチ地区のスカレーゼが所有する農園の中にある。単廊式の教会で、巨大な後陣が設けられている。後期ロマネスク様式を示す洞窟教会の典型的一例である。1956年に国が買い取り、1958年にローマ中央修復研究所が壁画をマッセッコ法で切断して移動、修復した。1968年に市内のエットーレ・ポマリチ・サントーマジ財団博物館内に、元の教会と同じ建築空間が作られ、壁画は再構築された。</p>	<p>Chiesa di S.Vito Vecchio</p> 
<p>(2) エットーレ・ポマリチ・サントーマジ財団博物館内の壁画展示室</p> <p>一連の壁画はプーリア州の画家による12～13世紀初めのものとされる。広い後陣には4人の天使が支えるマンデルラの中に、玉座に座る巨大な「パントクラトールのキリスト」。左側壁には「聖ピエトロ」「聖ラザロ」「聖ヤコブ(大)」「聖バシリウス」、「墓の前の天使と3人のマリア」。右側壁には、「アレクサンドリアの聖女カタリナ」「幼子イエスを抱く聖母マリア」「聖バルトロマイ」「バーリの聖ニコラウス」「聖女マルガリタ」が描かれている。それに続いて2人の聖人が描かれているが損傷が激しく、文字も判読しづらい。右の若い聖人が聖コスマス、左のひげを生やし司教冠をかぶった聖人が聖クリストフォルスと考えられている。</p>	<p>Fondazione Ettore Pomarici Santomasi</p> 
<p>(3) パードゥレ・エテルノ教会</p> <p>グラヴィーナ峡谷を挟んで旧市街地の西側に広がる凝灰岩台地にある。後陣を備えた二廊式の教会は、後陣部分が未完成である。長軸に対して横から身廊部の入口へ直接に下る階段があり、広い後陣のくぼみには壁画の断片が残っている。身廊の左側上部には3つの半円アーチが残っているだけで、アーチを支える2本の柱は消失している。後陣のくぼみには「パントクラトールのキリスト」を中心に、向かって左にはおそらく聖母マリア、右には福音書記者聖ヨハネと思われる壁画断片が残っている。</p>	<p>Chiesa del Padre Eterno</p> 
<p>(4) サン・ミケーレ・デッレ・グロッテ教会</p> <p>フンドヴィーコ地区を流れる急流によって掘られた深い峡谷の断崖にできた自然の洞窟で、旧市街地の南西に位置する。広い五廊式の教会で、天井は平ら、4つの後陣が設けられており、内陣は1段高くなっている。列柱はすべて1つの岩を削りぬいて作られており、中央の2本の柱は取り除かれて、広い空間が設けられている。湿気や破壊行為などにより、12～15世紀に描かれた壁画はわずかしか現存しない。左第1側廊の後陣部分には、左手に福音書を持って右手で人々に祝福を授ける「パントクラトールのキリスト」、その両側に大天使聖ミカエルと聖パオロの像がかすかに残っている。</p>	<p>Chiesa di S.Michele delle Grotte</p> 



自動車の入らない荒れた炎天下の草原を
重い機材を担いで運ぶ



複雑な構造の洞窟教会内も
レーザー測距計ひとつで
計測する

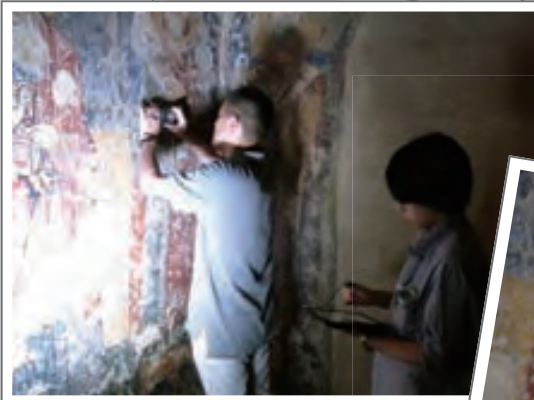
ポイントを移動しながら
教会の内も外もスキャンする



まるで息子を抱えるように
精密機器を大切に運ぶ



穴居生活のようだが、
洞窟内で一息つきながらのミーティング



デジタル・マイクロSCOOPは絵具の
塗り重ねの様子や筆跡の調査に威力を発揮する



現地の凝灰岩を砕いて下地を塗り、
原作を見ながらテンペラ画で忠実に模写する



発熱の少ないLEDライトの斜光を照射して
壁面の凹凸を撮影する

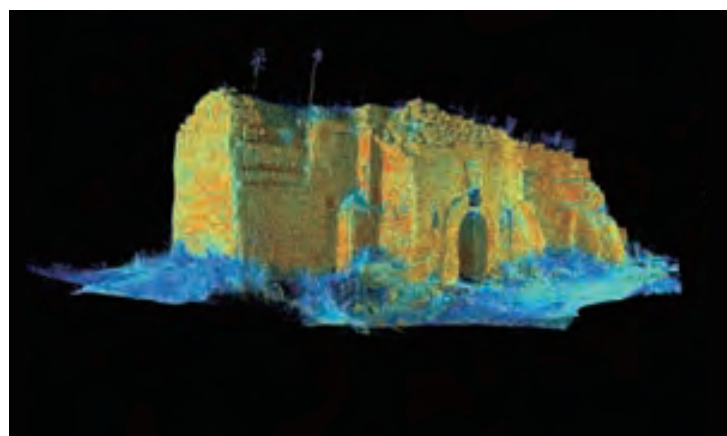


色差計で色を数値化して記録するだけでなく、
水彩絵具でもカラーサンプリングする

金沢大学のデジタルアーカイブ・測定した診断情報をデジタルアーカイブに



サン・ヴィート・ヴェッキオ教会



3Dスキャンして座標上の点集合の姿で読み取ら

システム 蓄積させるまでの流れ

壁面の記録

高精細写真



645D(PENTAX)

- LED可視光線照射
- 斜光線照射
- 紫外線照射



LED512(Flolight)

赤外線

サーモグラフィ



G30
(NEC/Avio)

水分計



HI-520
(Kett)

マイクروسコープ写真

静止画 動画



A200(3R)

色情報

• 色差計

NF333
(Nippon Denshoku)

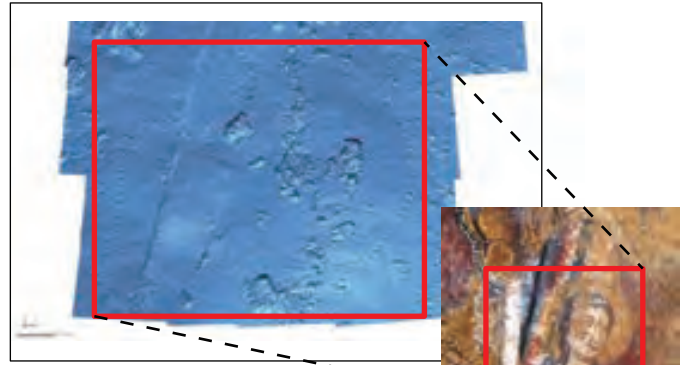


3D スキャン

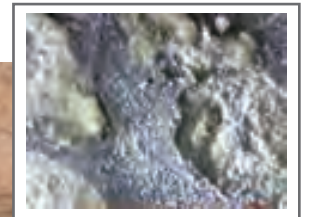
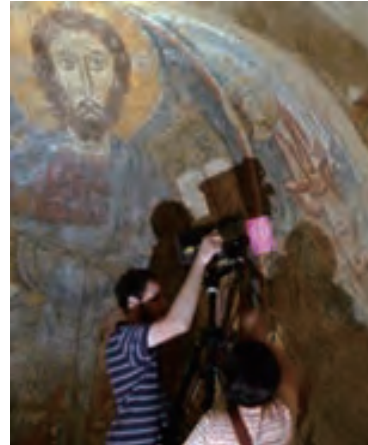
- Range5
(Konica Minolta)



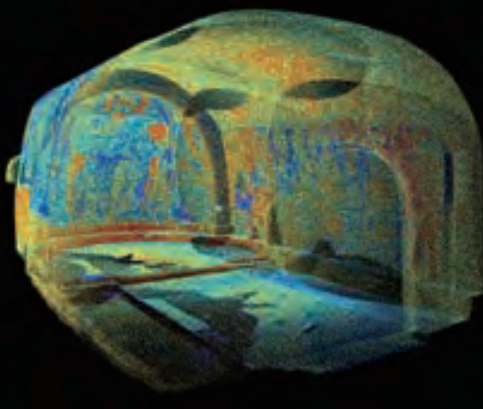
復元
模写



Range5でスキャンした
「天使の頭部」



デジタル・マイクروسコープに映し出される画像は
壁画技法の解読の新兵器



れた教会の外側と内側（高精細写真を貼り込む前）



トプコンGLS-1500を三脚に設置するのは3人がかり



市庁舎で市長や文化担当官を囲んで



グラヴィーナ市の関係者たちとの交流会では金沢大学の法被が大人気



南イタリアと金沢大学をスカイプで結び
遠隔授業



文献資料収集には現地の図書館も労を惜まず協力してくれる



斜光線による壁面調査を視察する
文化庁の宇田川調査官(右)と
東京文化財研究所の犬塚研究員(左)



少人数チームで調査を分担して移動するので、皆が現場で顔をそろえる機会めったにない



南イタリアの空は夕焼けでダイナミックな色彩に染まる

[日伊教育研究連携事業]

フレスコ壁画の修復実習：補彩法「カラーセレクション」

国立フィレンツェ修復研究所 専任修復士を招へい

「日伊教育研究連携事業」として、本年度は国立フィレンツェ修復研究所壁画部門の専任修復士ファブリーツィオ・バンディーニ氏を講師に迎え、人間社会学域人文学類フィールド文化学コース及び学校教育学類美術教育に所属する学生（30人）を対象にフレスコ壁画修復の講義と実習（集中講義）が11月17日～19日の3日間にわたって実施されました。



手本を示すバンディーニ修復士



実習風景

■講義：イタリアにおける壁画修復の歴史 / フレスコ壁画の修復技法と哲学

■実習：壁画修復における補彩法「カラーセレクション」

■カラーセレクション（伊 *selezione cromatica*）とは、絵画修復の最終段階で実施される補彩法で、一般的には水彩絵具かカゼインテンペラで絵画の欠損部分を目立たなくさせるために補筆すること。国立フィレンツェ修復研究所の伝統的補彩法では、破損欠損部分の周囲の色調や描写と違和感のない補彩を、無数の細い線を並行に引く線描法で丹念に行います。学生たちはフレスコ画の授業で制作した自分の作品の一部を故意に破損させた後、漆喰モルタルで欠損部を補填したり、破損させる代わりにアクリル樹脂を混ぜた石灰クリームで絵の一部を被覆した後、補彩する色彩を自分の目で色分解し、補彩の色を決めますが、この作業がもっとも重要かつ難関です。この独特の補彩法が、イタリア語でセレツィオーネ・クロマティカ（カラーセレクション）と呼ばれる理由もここにあります。



この亀裂欠損部分は、金沢大学の国際貢献プロジェクトで修復されたサンタ・クローチェ教会大礼拝堂壁画（14世紀末）で、「カラーセレクション」によって補彩してある。ただし、「亀裂」については建築構造と関わるものでなく、高さ26mに及ぶ大礼拝堂建築に描かれた壁画保存の点からすればこの「亀裂」はむしろ必要な「あそび」として完全に補填修復すべきでないと判断し、そのままにしてある。



ファブリーツィオ氏が学生たちに示した「カラーセレクション」のお手本

本学の大村雅章教授がフレスコ画法で模写した同上壁画の一部（「聖十字架の発見」場面の聖女ヘレナ）に疑似欠損部を作り、カゼインテンペラのカラーセレクションで補彩したものを。

研究者の横顔 第4回

600年の時を経て教えられたこと

金沢大学 人間社会研究域 准教授 江藤 望

作り手の立場で

私の専門は彫塑です。粘土を使って人体像を制作しています。20年以上作品制作を続けてきた経験を生かし、作り手の立場で調査・研究ができればと考えています。

壁画復元プロジェクトでは、工芸的装飾技法を担当しました。ゴシック期の壁画には絵の具による描写以外に、漆喰を盛り上げてつくられた光輪の表現や蜜蝋による宝飾の表現など、立体的な技法がふんだんに施されています。これらを総称して工芸的装飾技法と呼んでいます。そのほとんどに金属箔が貼られていました。600年以上たった今日、その多くが剥落していますが、完成時は想像を絶する豪華さであったと思われます。

妥協なき強靱な作家精神

私はこれらの技法解明を研究テーマとしていますが、この研究を通して、一人の制作者として600年前の画家から尋常ならぬ精神を教わっているような気がしてなりません。当時の美術作品には、人々にキリスト教の教えを伝えることが一つの機能としてありましたが、もう一つ、神への献上物としての存在もあったはず。なぜなら、観者からはよく見えない高さ26メートルの薄暗い天井近くの描写においても、最下層と何ら変わらない徹底した技術と優れた表現力で制作がなされて



◇所属：人間社会研究域 学校教育学系 ◇専門分野：彫刻 / 彫塑 / 塑造
◇研究課題：彫刻制作研究 / ロダン彫刻の研究 / 彫刻における造形要素について

いるからです。神への献上物であれば当然、妥協は許されるはずがありません。この強靱な作家精神を幾度も目のあたりにして、その度ごとに制作者である自分が恥ずかしくなる思いをさせられたのです。

真摯な気持ちで作品に向かう責務

昨今の美術において、私自身も含めて個人の無責任な表現が氾濫しているように思えてなりません。神に捧げる作品でなければとまではいいませんが、制作者としてもう少し真摯な気持ちで、今日の社会に機能した作品を制作する責務があるのではないかと感じています。

column

私のおすすめフレスコ壁画

第4回 「最後の晩餐」

金沢大学 医薬保健研究域 保健学系

教授 真田 茂



Photo: Shigeru Sanada

これはミラノのサン・マウリーツィオ教会にあるフレスコ壁画です。1550年頃にベルナルディーノ・ルーニによって描かれた「最後の晩餐」です。すなわち、1498年に完成したと言われるダ・ヴィンチの「最後の晩餐」のほぼ50年後に描かれたこととなります。

ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」はテンペラ画であったために、1520年頃にはカビが生え、さらに1550年頃には既に半分が剥落したと言われています。そのダ・ヴィンチの「最後の晩餐」の経年劣化の状況を鑑みて、ルーニは自らの描く「最後の晩餐」を、永く保存されるようにとフレスコ技法で描いたのでしょうか？一方、ダ・ヴィンチが「最後の晩餐」でこだわった遠近法については、ルーニは特に参考にしていないようです。

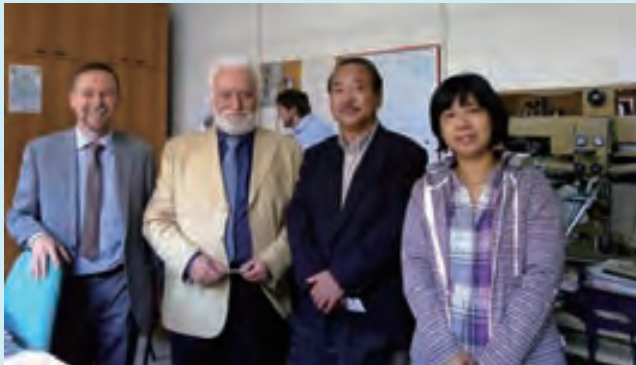
芸術的な価値は私には分かりませんが、ミラノで偶然見つけた、特に脚光を浴びることもないルーニのこの「最後の晩餐」に妙な愛着を私は感じています。

2011年度下半期トピックス & イベント

ジェノヴァ大学での発表

「文化財保存におけるレーザー技術の応用」と題して報告

ジェノヴァ大学工学部が主催する「レーザー・スキャナ技術の応用」に関する国内研究会が、9月20日にジェノヴァ大学工学部が拠点を置く16世紀のカンビアーゾ荘 (Villa Cambiaso) で開催されました。本プロジェクト協力者のカルロ・バッチェーニ氏を介して本学チームにも参加して発表してほしい旨の要請があり、南イタリア洞窟教会の壁画調査プロジェクト(壁画デジタルアーカイブ形成)における3Dスキャンシステムの有効性を宮下孝晴センター長が、グラヴィエ



ジェノヴァ大学工学部の地域環境工学科のドメニコ・ズグエルソ教授とガイド・グイダーノ教授とともに

ナ・イン・プーリアの洞窟教会での実際利用を宮下明珠研究員が「文化財保存におけるレーザー技術の応用」と題して報告しました。研究会終了後、南イタリアの洞窟教会にも詳しいジェノヴァ大学工学部の地域環境工学科のガイド・グイダーノ教授とドメニコ・ズグエルソ教授らの案内で、カンビアーゾ荘内に点在する各種の研究施設を視察し、今後の研究協力について具体的な話し合いがなされました。



16世紀に建設されたカンビアーゾ荘内のジェノヴァ大学講堂での発表

受賞報告 フレスコ壁画をモチーフにした論文が奨励賞を受賞

7月14日、大阪で催された「コンクリート工学年次大会2011」にて、第33回コンクリート工学講演会が行われ、数ある論文発表の中から石田聡史さん(本学 社会基盤工学専攻 博士前期課程1年/指導教員 五十嵐心一教授)の論文が、「年次論文奨励賞(日本コンクリート工学会)」を受賞しました。



題目：消石灰モルタルとセメントモルタルの中性化にともなう組織変化の特徴

内容：反射電子像の画像解析法を用いて、消石灰モルタルとセメントモルタルの中性化にともなう内部組織の変化を明らかにした。気硬性と水硬性モルタルにおける中性化領域の微視的構造の相違を、空間統計量により定量的に評価したことが高く評価された。



フレスコ壁画研究センター 写真展 & 国際講演会

- ★ 会場：しいのき迎賓館 セミナールーム
金沢市広阪2-1-1 電話 076-261-1111
- ★ 写真展：3月17日(土)～24日(土)
- ★ 講演会：3月17日(土) 13時～16時

講演会 聴講のお申込みは

本センターホームページの専用フォームからのお申込みまたは、官製はがきにお名前・ご住所・電話番号/メールアドレスを記載し郵送にて、2月末日までにお申し込みください。

ただし定員(100名)に達し次第、〆切といたします。ホームページは「フレスコ壁画」と検索してください。

2011年度下半期 活動一覧

- (10月) 大学コンソーシアム石川 公開講座
- (11月) 伊 壁画修復士を招へい、学生へ講義・実習指導
文化庁・国立文化財機構とのワークショップ
- (12月) 壁画修復プロジェクト 完成記念講演を共催
(名古屋 朝日ホール)
金沢大学附属図書館シンポジウム 講演
- (1月) 南伊プロジェクト現地予備調査実施
写真展 & 国際講演会(鳴門市 大塚国際美術館)
- (3月) 写真展 & 国際講演会(金沢市 しいのき迎賓館)

2011年度9月-1月 報道記録

○TV報道

南伊 中世壁画群診断調査プロジェクト
2011.11.18 テレビ金沢、北陸放送

壁画修復実習

2011.11.18 北陸放送

伊サント・クローチェ教会壁画修復プロジェクト
2012.1.28 テレビ金沢

○海外メディア

Chiese rupestri: il ritorno degli studiosi giapponesi (洞窟教会～日本調査隊の帰還)
2011.9.6 Murgia Time (伊)

○新聞報道

南伊 中世壁画群診断調査プロジェクト
2011.11.19 北國
2011.11.22 毎日
2011.11.25 北國

伊 国立修復研究所の専任修復士を招へい
2011.11.19 北國、北陸中日

Occhi da orientale a Gravina
(グラヴィーナに向けられる東洋の視線)
2011.9.9 GRAVINA Life (伊)

[文化庁連携事業] 4者連携ワークショップ

国宝「高松塚古墳壁画」の保存を考える

金沢大学×文化庁×国立文化財機構×伊 国立フィレンツェ修復研究所

期日：11月21,22日

於：奈良文化財研究所ほか

「南イタリア中世壁画群の診断調査プロジェクト」を日伊協同で展開する金沢大学フレスコ壁画研究センターは、11月21日、22日の2日間にわたり、文化庁と連携して「日伊文化財協力事業ワークショップ」を国立文化財機構奈良文化財研究所等で開催しました。このワークショップには、イタリア国立フィレンツェ修復研究所のファブリーツィオ・バンディーニ



国宝「高松塚古墳壁画」仮設修理施設で（写真提供：文化庁）

専任修復士、金沢大学フレスコ壁画研究センター長の宮下孝晴教授をはじめ研究員3名が参加、文化庁側からは文化財部古墳壁画室調査官の建石徹氏と宇田川滋正氏、東京文化財研究所から保存修復科学センター主任研究員の犬塚将英氏、奈良文化財研究所から保存修復科学研究室長の高妻洋成氏、降幡順子主任研究員等が参加しました。

はじめに金沢大学の宮下教授が、本年9月の南イタリア中世壁画群の調査報告として、プーリア州の洞窟教会4カ所で実施された壁画診断とデジタル記録の成果を紹介、次いで、ファブリーツィオ修復士からイタリアにおける壁画の修復・保存の現状についての説明がありました。

その後、奈良文化財研究所埋蔵文化財センター研究室、奈良国立博物館文化財修理所、国宝「高松塚古墳壁画」仮設修理施設、飛鳥資料館等を視察、実際に損傷激しい高松塚古墳壁画やキトラ古墳壁画を前にして壁画修復・保存に関する種々の問題について専門的議論が交わされました。

本センターと文化庁、奈良及び東京文化財研究所とが連携・協力することで、文化庁の「壁画の保存修復と活用の調和に関する協力事業」並びに本センターのプロジェクトが今後も高い専門的成果を上げ、日本のみならず世界の文化財修復・保存科学の進展に寄与していくことが期待される2日間でした。

連載 フレスコ八景 第四景

壁画ならではの魅力の一つに、当時の町並みなどが壁画中に描かれていることが多いということがある。持ち運びができる額縁入りのタペリー画と違って、壁画は画面も広いし「その場」を移動することがないから、市民へのサービスとして画家は「その町」を舞台に絵を構成したり、実際に「その場」で起こった事件をドキュメンタリー制作者として壁画に記録することも少なくない。写実的な描写が徹底してくるルネサンス期のフィレンツェでも、画家ドメニコ・ギルランダイオは誰よりも時代や生活をリアルに記録することに巧みであった。

有名ブティックが並んだフィレンツェのトルナブオーニ通りの突き当たりがトリニタ橋、右側に同名のサンタ・トリニタ教会、その向かい側にスピーニ宮殿（現在はブティックのフェッラガモ）がある。サンタ・トリニタ教会堂内のサッセッティ礼拝堂に描かれた壁画は、まさにそこを舞台として描かれた壁画なのである。なお、祭壇画の「牧者の礼拝」（1485）も同じギルランダイオの筆になる傑作である。

画面中央には、聖フランチェスコの奇跡によって甦った（サッセッティ家と親類であったスピーニ家の）少年。その背景を丹念に観察すると、左手のスピーニ宮殿の窓から真逆さまに墜落する少年、中央にはアルノ川に架かるトリニタ橋、右手にはサンタ・トリニタ教会が確認できる。もちろん、このフレスコ壁画が描かれたのは1482-86年だから、「町並みの記録」は15世紀末の姿で、甦った少年の周囲に描かれた人物群は当時



Photo: Takaharu Miyashita

のサッセッティ家に属する人々の肖像画である。

ところで、16世紀末に後期マニエリスム様式で改築されたサンタ・トリニタ教会のファサード（正面）だけが15世紀末に描かれた壁画中のものと大きく違っていて残念なのだが、教会堂内に入ってファサードの裏側を見れば、そこには壁画に描かれているのと同じロマネスク様式のファサードの面影が今も保存されていてうれしくなる。（宮下孝晴）

表紙：サン・ヴィート・ヴェッキオ洞窟教会に描かれた「パントクラトルのキリスト」の壁画 撮影：宮下 孝晴



金沢大学 フレスコ壁画研究センター ニュースレター（年2回発行）
編集発行 金沢大学フレスコ壁画研究センター
〒920-1192 金沢市角間町 金沢大学人間社会研究域
電話 (076)264-5550/5472 Eメール fresco@ed.kanazawa-u.ac.jp
<http://www.adm.kanazawa-u.ac.jp/fresco/index.html>
定期的にニュースレター郵送をご希望の方は、お名前ご住所と連絡可能な電話番号またはe-mailアドレスを添えてご連絡ください。
本ニュースレターの内容を無断転載することを禁じます